

# 魔女の封印



I

中国料理店「青天酒家」は、麻布台の私の事務所兼住居から歩いて四、五分の、東麻布にある。経営者の許建宏を知っていることもあって、二階の個室を仕事でよく使っていた。

その日の依頼人は日本料理のチェーン店を運営する長谷川で、中国でのレストラン事業を共同展開しないかともちかけてきた相葉あいはという人物を見てもらいたいというものだった。相葉の身許みもとについて特に問題がないことは把握している。ただし人間性についてはわからない。そこで私に判断の依頼がきた。

長谷川の父親は昭和の高名な料理人で、一年先まで予約がとれないといわれた割烹を新橋で開いていた。息子は料理より経営の才能があつて、父親の名を冠した料理店を東京、大阪、博多にもち、どれもうまくいっている。やたらに手を広げないだけの頭があり、とはいえ金儲けの機会は逃したくないというわけだ。

長谷川を私に紹介したのは、銀行員から経営コンサルタントに転身し、成功した井上いのうえだった。井上とは、彼が支店長をしていた時代からの知り合いだ。経営コンサルタントを開業してからは、何度か私のクライアントにもなった。

私は井上のアシスタントという触れこみで会食に同席していた。井上を相葉にひき合わせようとしたが、当日のつびきならない用事ができてしまい、かわりにアシスタントの私が出席したという筋書きだ。井上や長谷川の愛人という誤解を招かないように、化粧は極力薄めにし、野暮つたい黒のパンツスーツを着けている。黒縁の眼鏡もかけようかといったら、星川にやりすぎだと止められた。

星川は、私の調査員兼ボディガードで、運転手の木崎きさきとともに今は事務所待機している。

相葉は台湾人の父親と日本人の母親のあいだに生まれ、一九九八年から上海に留学し、帰国して間もなく、今の事業を立ちあげた。

過去、寿司やラーメン店、スポーツカフェなどの中国出店を手がけ、それなりに成功させている。中国で必要なのは、「日本で知られた名店」というブランドで、日中の関係が決してうまくいっていない今でも集客は可能だと、フカヒレの煮込みを食べながら力説した。

四十一という年齢のわりには老けて見える。前髪が後退しているのとメタルフレームの眼鏡が理由で、自ら老け顔を演出している可能性もあると私は思った。事業を共同で展開しようともちかける相手に若造という印象を与えたくないのだろう。

やや目と目のあいだが開いており、まばたきの回数が多い。嘔吐おうときではないが、利に聴きこく、躊躇せず仕事の相手を乗りかえる。依頼人の長谷川にも似たところがあり、会って私はおかしくなった。「似た者どうし」だといったら、長谷川は相葉と組むのをためらうだろうか。

フカヒレの煮込みを食べ終えたとき、個室の扉が開き、黒のスーツを着た男が入ってきた。「青天酒家」ではボーイはすべて黒スーツに蝶タイをしているが、男は蝶タイではなく、淡いピンクのネクタイを締めていた。個室に他の従業員はおらず、

「紹興酒のお代わりを頼む」

と長谷川が男に告げた。男の青白い頬が笑いをこらえるようにひくついた。だが目は長谷川を向かず、相葉を凝視している。相葉とは逆に目の間隔が狭く、目頭が極端に下がっていた。どこか焦点が定まっていない。

「申しわけありません。ちよっとお手洗いに失礼します」

私はいって、椅子を引いた。とたんに男の目が動き、私を見た。目を合わせないようにしながら、私はナブキンをテーブルにおいた。

男が小さくうなずき、長谷川に、「承知しました」

といつて、個室の扉を押した。私がそこを通り抜けるのを待たず、先にでていく。

廊下にてると男の姿はなかった。二階の個室はふた部屋で、もうひと部屋は今日は使われていない筈だ。階段を降りていくと、炙りたての北京ダックを盛った盆を手にしたボーイとすれちがった。

「許さんは？」

「一階です」

ボーイは答えた。「青天酒家」の従業員は全員中国人で、日本語があまり堪能ではない。個室での会話の秘密が守られる理由でもある。

階段を降りながら、パンツのポケットから携帯をとりだした。星川を呼びだす。

「早いわね、もう終わったの？」

電話にでるなり星川はいった。一階の女子用トイレに入り、先客がいなのを確認して私はい

った。

「ちよつとまずいことになった。殺し屋がいる」

「マジで？」

「確認してないけど、おそらく」

「あんたなの」

「たぶんちがう。クライアントでもない」

「今どこ？」

「一階のトイレ」

「そのまま帰ってくれば」

「クライアントと対象者を見殺しにして？」

「じゃあたしがいく？」

「それまでもつかない。いったん個室に入ってきて、でてったのは、ターゲットの確認だと思う。

ここでやるのか、それともでたときを狙うのかはわからない」

「そこだったら時間ないね。でも今日、あたし丸腰」

「スタンガンなら、あたしのデスクに入ってる。右側の一番下のひきだし」

「待って」

星川が動く気配があり、やがて「あつた」とつぶやく声が出た。

「時間稼げる？」

星川が訊ねた。

「やってみる」

電話を切りトイレをでた。一階の事務室の扉をノックすると、許が現われた。

「水原さん、どうしたか。お料理、何か駄目か」

許は新華僑にしては珍しく、でっぷりと太っている。この「青天酒家」以外に新宿と池袋で中国料理店を経営していて、原資は二〇〇〇年代、新宿での地下銀行の運営で稼いだ。

太ったのは「青天酒家」を開業してからで、臆病であるがゆえに人を切り捨てられず、増えるいっぽうのしがらみからくるストレスが、体に肉をつけた。

「新しい従業員、入れた？ 目の吊りあがった男。さつき部屋に入ってきたけど」  
許は首をふった。

「入れてない。水原さんの知ってる人ばかりだよ」

「そう。じゃあ頼みがある。上にきて、あたしといえる人たちに挨拶してくれない。できればマネージャーとかも連れて」

「今か。それともあとで？」

「今すぐ」

「わかった」

許は中国語で叫んだ。私も顔を知る三十代のマネージャーが現われた。髪をオールバックにした、甘い男前だ。このマネージャーが歌舞伎町でもぐりのガールズバーを経営しているのを私は知っていた。交渉しだいで客とホテルにいく中国人女がカウンターに立っている。

もしかすると殺し屋の狙いはこのマネージャーかもしれないと思い、そうならここではなく歌舞伎町の店を襲撃した筈だと考えなおした。

許とマネージャーを連れ、私は階段をあがった。使われていない個室の扉が細めに開いている。

その前で若いボーイとウエイトレスが、北京ダックの皮を剥いでいた。

部屋の扉を開け、長谷川と相葉に告げた。

「お話し中すみません。こちらの社長にご挨拶したいと声をかけられたのですけど」

「お邪魔します。私、この社長しています許建宏です。皆さんにご挨拶したくてきました。お料理、いかがですか」

如才なく許が頭を下げた。ここで私が個室を使うときは身分を偽っていることを許は知っている。だから私の名などは口にせず、あくまで自分を売りこみにきたように二人には振舞うし、実際さうしたがる男だ。

許は名刺を二人にさしだした。

「こちらは中国でレストラン事業を展開していらつしやる相葉さんです」

相葉が中国語で挨拶すると、許は目をみはつた。二人の中国語のやりとりが始まった。

私は長谷川を見た。やや驚いた顔だが、許を連れてきたのが私の作戦だと思つたのか、特に気分を害しているようすはない。

「おや、お酒ないですね。とてもいい紹興酒、ボトルでサービスします」

空になつた徳利に気づき、許が開けはなつた扉からボーイを呼んだ。

「こちらは日本料理の『恭平』を経営していらつしやる長谷川さんです」

「『恭平』！ 知つてます。とても有名な和食のお店ですね。私もいきたいけれど、高くてもいけません」

「とんでもない。いつでもいらして下さい」

長谷川はいつて名刺交換をした。



「お料理いかがですか。おいしくないものありませんか」

「いやいや、すごくおいしいですよ。相葉さんもほめてました。なかなか日本でこれだけのものは食べられない、と」

「嬉しいですね。いつでも大歓迎します。『青天酒家』きて下さい」

「うちの井上も、ここにはよくお世話になっっているんです」

私はいった。許は笑い声をたてた。

「井上先生！ とてもいい人です。でも私といっしょで、少し食べ過ぎ。糖尿、心配ですよ」

「許さんはいつ日本にきたの？」

長谷川が訊ねた。

「古いですよ。もうじき二十年になります。最初のお店は新宿でした」

私はもうひとつの個室を見た。扉がさつきより閉まっている。その手前では剥ぎとった北京ダックの皮を、手袋をしたボーイとウエイトレスが餅で巻いていた。

やがて北京ダックを盛りつけた大皿と紹興酒がテーブルに届いた。

「せっかくのお話、お邪魔して失礼しました。このあとのお料理も楽しんでください」

許はマネージャーを連れて、でていった。扉が閉まる。稼いだ時間は十分間あったかどうかだ。

「確かにこの北京ダックもうまい。甜麵醬チンジャンも甘すぎなくていいですよ」

相葉がまん中から噛みちぎった餅を咀嚼そしゃくしながら頷いた。

「井上先生もこんな店に通っていたら、確かに太りますな」

長谷川がいった。

扉が開いた。ピンクのネクタイを締めた男がすべりこむように部屋の入口に立った。

「あのう、すみません。冷たいジャスマン茶をいただけますか」

私は男にいった。男は返事をせず、上着の内側から拳銃をとりだした。マカロフの中国製コピーだ。手袋をはめている。

「えっ、なに、なに」

長谷川がつぶやいた。銃口はまっすぐ相葉を向いていた。

男が一步踏みだし、相葉の顔に銃を向けた。相葉はただ目をみはっている。

細めに開いていた扉からジーンズに革ジャケットを着けた女が入りこんだ。無言で手にしていたスタンガンを男のうなじに押しあてる。星川だった。

青い火花が飛び、ふりむきかけた男が全身を痙攣けいれんさせた。星川は容赦せず、男が床に崩れ落ちるまで電流を浴びせた。

男の目が裏返り、音をたてて転がった。肉と髪の毛の焦げる匂いが漂う。

星川は倒れた男の手から拳銃をもぎとった。

「間一髪ね」

葉室と弾倉をチェックしていった。

「それ、あたしのジャケットじゃない？」

私は星川にいった。星川は肩をすくめた。

「今日、上着をきてこなかったの。借りた」

「わざわざ一番いいのを選んで？」

確か銀座のショップで七十万円した。

「軽くて、最高」

私は息を吐き、相葉を見た。

「中国人に命を狙われる覚えはありますか」

相葉は蒼白だった。

「そんな……いや、でも——」

「かなり恨まれているみたいですが」

相葉は私から星川に目を移した。

「こちらは——」

「あたしの友人です」

「よろしく」

星川は腰をかがめた。相葉はあつけにとられたように見ている。

全身整形手術をうけ、顔と体は女になっているが、星川はもともと警察官だった男だ。黙っていれば体格のいい女に見えるが、おかま声だけはどうしようもない。

「水原さん、いったいどういうことです」

ようやく長谷川がいった。

「警察呼ぶ？」

星川の問いに私は頷いた。星川は部屋をでていった。

「さつきこの男が入ってきたとき、危ないとすぐに思いました。殺し屋の顔でした」

「殺し屋の顔って……」

「この男の目です。人殺しを重ねていると、こういう目になる」

「なんでそんなことがわかるんだ」

相葉がつぶやいた。

「それが仕事だから」

「仕事？」

「水原さんのご職業です。実は井上先生とは別で、コンサルタントをしておられる」

私は立ちあがり、倒れている男の腰からベルトをひき抜くと、うしろ手に縛った。上着の中にナイフももっていた。銃が作動不良を起こしたときに備えたのだろう。身分のわかるものもっていない。プロだ。

相葉だけでなく、個室にいる全員を殺す気でいたことはまちがいない。

「何のコンサルタントなのです？」

「人間性を見抜くんです」

長谷川がいった。相葉は信じられないようだった。

「見るだけで？」

私は頷いた。

「対象は男性だけです。たいいの男は、見たらわかるし、寝ればほぼ百パーセントわかる」

「井上先生を通して、私がお願いしました。相葉さんのことを知りたかったので、まさか、ここまで恨みを買っておられるとは」

長谷川がいうと、相葉は狼狽ろうばいしたように腰を浮かせた。

「いや、私はそんな、殺し屋に狙われるような覚えはありません」

「この男の目的は相葉さんでした。最初に部屋に入ってきたのは、相葉さんを確認するためです。その場でやるつもりだったのかもしれないけど、タイミングを狂わされた」

私はいった。

「タイムイング？」

「紹興酒のお代わりを頼んだ」

「そういえば……」

「あの場で三人全員を殺すつもりだったけれど、気合を殺がれたのでしよう。でもそれで私たちは助かった」

「何度もうかが、私は命を狙われる覚えなんてない」

相葉がいった。

「だったらこの男を解放して、銃を返してみる？ 最初に誰を撃つかでわかる」

「冗談でしょう」

「もちろん。でもバートナーをころかえる癖が誰かの恨みを買ったのかもしれない」

星川が戻ってきた。うしろに許建宏や他の従業員がついてくる。

「連絡した。面倒だから大神に直接いった」

「大神に？」

「最初は所轄の巡査でしょう。それから刑事課から人を呼んで、結局最後は本庁がでてくる。だから始めから話のわかっている人間呼んだほうが早い」

大神は警視庁組織犯罪対策部の警視だ。公安部の湯浅ゆあさの紹介で知り合った。貸し借りという点では、私の貸しのほうが少し多い。向こうがどう思っているかは知らないが。

倒れている男が呻うめき声をあげた。身をよじり、中国語らしき言葉をつぶやいた。

許がかがみこみ、中国語で話しかけた。男は首をもたげ、憎々しげに答えた。

「何ていつてるの？」

「放さなかつたら皆殺しにしてやる」

相葉がいい、男に中国語で話しかけた。男は顎で相葉を示した。通訳されなくとも意味はわかつた。

誰を狙つたんだ。お前だ。

蒼白になつた相葉がさらに何かを訊ねた。だが男は首をふつた。

「誰が相葉さんを殺したいのか？ 訊いてもたぶんこの男は知らない」  
私はいつた。

「水原さん、中国語がわかるんですか」

長谷川が訊ねた。

「いいえ。でもたぶんそういつたのでしよう」

相葉が私をふりかえり頷いた。

「そうですけど、どうしてそんなことまでわかるんですか」

「プロはそうだから」

星川が答えた。

相葉は途方に暮れたように、浮かせていた腰をおろした。

「こんなときに申しわけありませんが、お話はなかつたことになっていただきたい」

長谷川がいつた。

「え？ あ、はい。承知しました」

相葉はつぶやいてうつむいた。それから思いだしたように私を見た。

「本当に見ただけで、この男が殺し屋だってわかったんですか」

「嫌な女でしょう」

星川がおかしそうにいった。私はにらみつけた。

「許さんに頼んで時間稼ぎをしてもらった。じゃなけりやあのあとすぐ、撃たれてた」

「水原さんに命を助けられたわけだ」

長谷川がつぶやいた。

「どうしてそんなことができるんです。テレパシーですか」

相葉が訊ねた。私は首をふった。

「まさか。でも理由は教えられない」

やがて警官が到着した。

## 2

「いづれまた会うとは思ってたが、こんなに早いとはな」

大神はいった。がつしりした体つきに似合わない黒縁の眼鏡をかけている。頭は悪くないが、ものごとを単純化して考え、直接的な行動で問題を解決したがる。極道には冷酷で、濡れ衣ぬれぎぬを着せることもためらわない。

「まだ同じところにいるの？」

二年前、大神は組織犯罪対策部の四課の管理官をしていた。

「今は組対の一課だ。国際犯罪だから、ちょうど担当というわけだ」

私と大神は、使われていないほうの個室で向かいあっていた。食事をしていた個室では、大神の部下が長谷川や相葉に事情聴取をおこなっている。

「中国人の殺し屋だな、あれは。たぶん、きのうかおととい、成田に連れてこられて、仕事が終わったら今夜にでも中国に戻される予定だった」

大神は目を細めた。

「あんたを狙ったのじゃないのか」

二年前、私は大神に協力して上海の新興マフィアと日本の暴力団のあいだに生まれようとしていた朝鮮民族系マフィアの芽を潰した。大神はもともとキャリア警察官で、外務省に出向して領事をつとめた経験もあるくせに、拳銃と抗弾ベストを身につけて現場に立つのを好んでいる。

「狙われたのがあたしなら、あなたや湯浅のところには何か話が入ってきているでしょう。入っても、教えてはくれなかつたらうけど」

二年前私が協力したのは警視庁ではなかつた。中国国家安全部と人民解放軍の情報部も関係していた。中国政府のほうがむしろ国境を超えた民族マフィアの萌芽を警戒していた。

私は好んで警視庁や中国国家安全部とかかわったわけではなかつた。殺人と爆破の容疑をかけられ韓国の釜山に逃げているときに知りあつた、白理という上海市警察の元女刑事の復讐に巻きこまれたのだ。

夫と子供を犯罪組織に爆殺された白理の復讐と、警視庁、中国国家安全部の利益がたまたま一致したおかげで、私は生きのび、かつてと同じ、裏のコンサルタントの仕事に戻ることができた。「入ってないよ」

大神はあつさりといった。



「標的はたぶん相葉だろう。中国じゃ評判が最悪らしい。少しでも儲けになりそうだったら、組む相手を探るところかえる、とな。裏であいつは『上海人よりも上海人らしい日本人』と呼ばれてるそうだ」

「知ってるの？」

「西のマネーロンダリングにかかわってるって情報があった」

別に驚くにはあたらぬ。中国の犯罪組織が東京のタワーマンションを買い漁って金を洗うのもそうなら、日本の暴力団が上海や大連に寿司店をオープンさせるのも同じ資金洗浄だ。

「会うのは今日が初めて。寝る相手を探るところかえる奴だとはすぐにわかったけど」  
大神は横を向いた。

「あんたのその特殊能力のことは湯浅からも聞いてたが、まるで信じられなかった」

「信じてもらわなくてもけっこう」

「証明したじゃないか、今日」

「顔を見て殺し屋だと見抜いたって、報告書に書くの？」

「まさか。そうだな、すれちがったときに隠しもつたピストルが見えた、とでもするか」

「それでいい」

私は頷いた。警視庁に「理解者」をもちたいとは思わない。

「そーいや、湯浅だが今は警察庁サツチョウにいる」

「出世したのね」

「準キヤリにしちゃいい勢いだ。もともと公安はんが向いてるんだらう。あんたの大ファンだしな」

「あたしはあいつのファンじゃない」

大神は無言だった。

「帰っていい？」

「どうぞ。あんたのところのおかまが使ったスタンガンは預かる」

「おかまつていつたら傷つくわよ。工事ずみなのだから」

私はいつて個室をでていった。先に事情聴取を終えた星川が、階段の踊り場におかれた椅子にかけ、足を組んでいた。私は階段の上に立ち、それを見おろした。

「何？」

「女しておくのが惜しいと思って」

ふん、と星川は鼻を鳴らした。

「たとえ男のままだって、あんたとはつきあわない。魔女の彼女なんてまっぴら」

「給料払ってるじゃない」

「何回、命を助けた？」

顔を見合わせ、笑った。

「いこう。中断しちやった晩ご飯食べよう。奢る」

私はいった。

「北京ダックがいい。さつき見て、ヨダレがでた」

「勘弁してよ」

「駄目。北京ダック！」

二人で「青天酒家」をでた。木崎のアルファードが目の前に止まっている。そのうしろに白のプリウスがいた。運転席から湯浅が降りたつた。

「嫌だ」

私はつぶやいた。四十代初めで、妙に歯が白く、切れ長の目をした二枚目だ。どんなときでも、どんな相手にでも嘘を吐ける。

湯浅は濃紺のスーツに白いシャツをノーネクタイで着こんでいた。

「おひさしぶりです。水原さん、星川さん」

につこりと微笑み、小さく頭を下げた。

「なんでそんなにダサイ車に乗ってるの」

星川がいった。

「会社が変わりましてね。こんなのしかないんですよ。下っ端が乗れるのは」

哀れみを乞うように、ため息を吐いた。

「会社ちがいなら、くる用はないのじゃない？」

私は冷たくいつてやった。貸し借りでいうと、私の借りのほうが多いかもしれない。

「水原さんにお願ひしたいことがあるんです」

真面目くさった顔で湯浅はいった。

「星川さんが大神さん呼びだされたと聞いたんで、大急ぎで現場にきました」

「話だけなら聞いてもいい。ただし晩ご飯奢つてくれるなら」

「北京ダックよ」

星川がいい添えた。

「ここほどおいしい北京ダックの店を知らないんですが」

「捜せば。刑事でしょう」

湯浅は首をふった。

「今やただの小役人です」

「じゃ、話は聞かない」

湯浅は宙を見つめ、

「えーと、オリエンタルパークホテルの中華なら、まあまあ、いけると思っています」とつぶやいた。

「あら、オリエンタルパーク？ 豪華じゃない。よかった、高いジャケット借りてきて」

嬉しそうに星川がいった。

アルファードとプリウスの二台で、丸の内のホテルに向かった。予約は湯浅がとりつける筈だ。当然個室ということになるだろう。

中身のいない鳥籠がやたらに天井からぶらさがった中国料理店だった。

小さな円卓のある部屋に入ると、前菜とジャンパンを頼んだ。コースではなく、すぐに北京ダックを多めにもつてくるよう、湯浅はマネージャーらしき男に命じた。対応を見ている限り、相当の顔だ。

「小役人は高級ホテルに顔がきくのね」

「皮肉はやめて下さい」

「煙草は吸えないの？」

「個室は大丈夫の筈です。灰皿を用意させます」

湯浅はいつて部屋をでていった。ベルエポックが届いた。ドンペリよりこちらのほうが好みだ。湯浅が戻ってくるのを待って乾杯した。

「お元氣そうで何よりです。事業は順調ですか？」

「元に戻すのに半年くらいかかった。東山に渡した事業はあきらめた」

「破門ですからね。まだ出所できていませんし、水原さんには手をだせない。西もよぶんな真似をして締めあげられる愚はおかさない」

東山というのが、日本側の「民族マフィア」の仕掛人だった。西の幹部の息子でありながら、東の大組織、連合で修業し、「ニューウェーブ」として売りだしていた。たとえば自由が丘でチヨコレートショップを経営し、当てる、といった具合だ。東山を連合に送りこんだのは、実の父親で、西の幹部だった新山あらやまだ。新山は西の組織内で秘かに「民族マフィア」の土台を構築しようとしていた。それを暴いた私に怒り狂い、自らの手で殺そうとした。

「西があたしを殺さないのは、マフィアの件で今の親分が動揺したからだって聞いたけど」

「新山の考えていることにまったく気づいていなかったからです。それに暴排条例のせいで下からのつきあががきつくなり、極道は身動きがとれない。水原さんを生かしておきたくない人間はいるでしょうが、鉄砲玉は飛ばせないわ、外国のプロを使うのは新山の件があつたんでためらわれるわ、で。つまり水原さんは運がいい」

「そうなんだ」

星川がいった。

「この二年で、極道は本当に追いつめられています。廃業したり盃を返して、水面下で商売を始める手合いが増えるそうです。私は専門家ではないのでわかりませんが」

立ちあがり、私と星川のフルートグラスにシャンパンを注ぎ足した。

「星川さんは、会うたびに美人になりますね」

「ありがとう。公安じゃなけりや、あなたも好みよ」

「先に帰ろうか」

私はいった。自分が星川のタイプであることに湯浅は気づき、とりこもうとしている。

「それはちよつと……」

「あたしならオツケーよ。ときどき使わないと塞がつちやうし」

湯浅は咳ばらいをした。

「本題に入ります。水原さんに見ていただきたい人物がいるのです」

「何者？」

「それがまつたくわからない。戸籍も偽造で、本名も年齢も不明なのです。おそらく日本人なのですが」

「よくある話じゃないの。元は北朝鮮の工作員とか」

星川がシャンパンをすすつていった。湯浅は首をふつた。

「たぶん日本人で、金ももっている。ただ正体がつかめない」

「何か、したの？」

私は訊ねた。

「それは……直接会っていただいてから、お話しします」

「写真は？」

星川がいうと、湯浅は上着からとりだした。

「写真ではわからないのですよね」

確かめるようにいった。私は頷いた。

私の男を見抜く能力は、写真を見ただけではあまりうまく働かない。動画ならまだですが、やはり直接会うのが一番だ。話すときの身ぶり、目の動き、声のトーンが顔つきと一体となつて、本性を感じさせる。さらにまちがいなく知ろうと思うならセックスをすることだが、最近はそのままで深い調査の依頼はめつたにうけない。

写真の男は六十代の始めに見えた。理知的に見える広い額と厳しさと諦めあきらの混じつたような目もとの深い皺しわが印象的だ。プレスのきいたシャツの襟や高価そうな生地ジャケットから、男が裕福な暮らしをしているであろうことは想像がつく。

他の印象はない。

奇妙だった。まちがうときはあるが、写真からでも多少人となりを感じる事ができる。写真を仕事で使わないのは、実際に会ってみると見落として気づく場合が多いからだ、この男に対して、私は何も感じなかった。

「堂上保どうがみほつという人物です。戸籍上は京都に本籍があり、現在は東京の虎ノ門で古美術店をやっています。年齢は六十二」

「見てほしい理由の想像は、つかないわね」

私は写真を返した。その一瞬、ぞくつとした。写真の中の堂上が私を見あげている、そんな錯覚を感じた。

「勾留してるの？」

星川の問いに湯浅は首をふつた。

「いえ」

「じゃあ何を知りたいわけ？」

「とにかく会って下さい。会って、堂上がどんな男かを見て、教えてほしいんです」

星川が私を見た。おもしろがっている。

「報酬は？」

湯浅は深々と息を吸いこんだ。

「この食事だけじゃ駄目ですよね」

「もちろん」

「しかし正規の契約を水原さんの事務所と結ぶのはちよつと……」

「機密費があるでしょう。税金のかからない稼ぎになる」

星川がいった。私は首をふった。

「いいわ。借りを感じてないわけじゃないし、一度だけならサービスする。どうやって会う？」

「その方法を相談したいと思つていたんです。堂上は『鞍馬のおぼはん』とつきあいがあります。それを使えませんか」

「あら」

星川が微笑んだ。

「京都でおいしいもの食べるチャンスじゃない？」

「鞍馬のおぼはん」とは、京都市北部鞍馬山の山麓にある浄寂院じようじやくいんの庵主、浄景尼じようけいににつけられた渾名なづなだ。得度するまでは、鳴神一家という博徒系の古い組を率いていた。夫の死後、仏門に入ると決めた彼女は組を解散したが、それにあたって足を洗えない組員ひとりひとりの身の振り先を自ら探し、頭を下げて歩いた。幹部の多くは引退したが、一部は西にひきとられた。それは鳴神一家の縄張りをひきつぐことにつながり、「鞍馬のおぼはん」の威光を関西に及ぼす結果となつて



いる。

「あなたは、この堂上についてこつちで調べて」

私はびしりといった。関西が安全だという確証はまだないが、浄景尼と会うのであればボディガードはおそらく必要ない。

「はいはい」

星川は恨めしげにいつて、湯浅を見やった。

「本当におふたりは仲がいいんですね」

湯浅は笑みを浮かべた。

「こき使われているだけよ」

それを無視して私は訊ねた。

「浄景尼とつきあいがあると、なぜわかった？」

「堂上の行確の報告です。先月、二度ほど浄寂院を訪ねています。どちらも一時間足らずでしたが、浄景尼と面談をしたようです」

行確とは行動確認のことだ。

「盗聴はしなかったの？」

「京都府警にそこまで頼めません」

「本籍が京都なら、もともとのつきあいがあったのかもしれない。虎ノ門で古美術商をする前は京都にいたとか」

星川が訊ねた。湯浅は首をふった。

「虎ノ門で始めたのは昭和四十五年ですから、今から四十年前以上前のことで、それ以前の経歴は

不明です」

「二十代の始めて古美術店をもったってこと？ 跡継ぎだったわけ？」

「それは不明ですが、戸籍上の父親は、昭和四十年に死亡しています」

私と星川は顔を見合わせた。

「父親がやっていった店を、一人前になるまで番頭に任せていたのかな」

星川がいうと、

「いえ、『堂上堂』どうじやうどうは、昭和四十五年が創業です。現在、堂上はほとんど店にでていないようですが」

「『堂上堂』っていうんだ」

「それなら店をやってるのは誰なの」

「番頭の石川いしかわという男です」

浄寂院を訪ねるのに口実はいらないし、妙な嘘を浄景尼につきたくなかった。だが知り合いについて教えてくれと押しかける無作法も避けたい。

「京都はあとにする」

私はいった。

「やれる範囲で調べて、それからよ」

### 3

「堂上堂」は桜田通りを西に二本ほど入った、ホテルオークラに近い一画にあった。約三十坪ほ

どの平屋の建物で、たとえ四十年以上前とはいえ、そのあたりで土地を買うのは簡単ではなかった筈だ。時間がたちすぎているので、土地の売り主を調べるのは難しいだろうと思つたが、星川は調べてきた。

昭和四十五年以前、そのあたり一帯は栗山直之という人物の屋敷だつた。栗山は「チェスターシッピング」という船会社を所有しており、昭和二十年代から三十年代にかけ、かなり儲けたようだ。昭和四十四年に七十歳で事業から引退し、四十五年に亡くなつた。亡くなつた後分割された土地の一部を、「堂上堂」が購入したのだ。

私は客を装つて「堂上堂」を訪ねてみた。

「堂上堂」は、暗色のガラスのはまつたショウウインドウと金文字で店名が記された木製の大きな扉があり、決して入りやすい雰囲気ではなかつた。ショウウインドウの中には景徳鎮おぼと思しい、白い大きな壺が飾られている。

扉を押すと、店内は意外にものが少なかつた。陶器だけでなく、絵画や書なども飾られているが、整然としていて、冷やかしの客を拒むような静けさがある。骨董屋とはそんなものかもしれない。

「堂上堂」を訪ねる前に、私は中野で骨董屋をやっている知り合いに電話を入れていた。

『堂上堂』つて知ってる？ 虎ノ門の」

「え、まだやつてるんですか」

知り合いは驚いたようにいった。刀剣や甲冑を主に扱っている男だが、故買屋とはいえないまでも、かなり出どころに問題がある品も場合によっては買いつている。

「古いところなのね」

「ていうか、競売とかにもほとんど現われないので、とつくに廃業したと思つてました」

「店主を知つてる？」

「いえ、だいたいきていたのは、番頭さんらしい人です。前は、相当な品物を仲介しているという話でしたが」

「相当な品物というと？」

「千万、億単位ですが、ただの噂かもしれません。税金やら何やらの問題があるんで、それだけのお品だと相対あいたいになりますからね」

「店はまだあるみたい」

「まあ、うちあたりとちがつてかなりおも、ち、なんじゃないですか。小商いにあくせくしなくてもやつていけるんでしょう」

「どこからでてきたか聞いたことはある？ 修業しないで始められる商売じゃないでしょう？」  
偽物や盗品をつかまされることが少なくない商売だ。ものにも人にも目利きでなければやつていけない。

「いや、聞いたことはないですね。番頭さんもたぶんあの店で修業したのだと思いますよ。社長についちゃまったく。まあ、商売より趣味つていうのじゃなけりや、やつていられない業界ですからね。今どきの金持は、まず骨董なんか金を使いませんし」

「でも店を始めたのは若い頃でしょう。四十年以上前なのだから」

「いや、若くないでしょう。私ね、修業時代にお客さまのお宅で一度、『堂上堂』の社長さんを見かけたことがあるんです。それが昭和五十四、五年でしたから」

「いくつくらいだったの、『堂上堂』は」

「五十ちよつとくらいですかね。だから生きてりや九十近い筈ですよ」

するとやはり二代目なのだ。先代が父親でないとすれば、叔父あたりから継いだのだろう。

「どんな雰囲気の人だった？」

「さすがにそこまでは覚えていません」

男は笑い声をたてた。確か、今年七十になる。

私はダウンライトに浮かんでいるおきものに目をこらした。翡翠と銀でできた千支の飾りものだ。似たような品を、上海の露店で見かけたことがある。

「清しんのものです。十一代目の光緒帝の即位のときに配られた品のようです。十九世紀ですから、それほど古いものではありません」

店の奥から声がかげられた。気配を感じていなかったので、驚いた。並んでいる陳列棚の陰に男が立っていた。茶のスーツに細いネクタイを結んでいる。五十くらいだろうか。太っていて、まん丸い顔だが、愛敬よりもむしろ悲しげな表情を浮かべていた。

警戒心が強く、しかしそれを露あわにはしないタイプだ。

「こういうものに詳しくはないのですが、高いのですか。母が今年古希なので贈ろうかと思つたのですか」

「十二支すべてセットで、でしょうか」

「いえ……」

「申しわけございません。単品ではお売りできないんです」

男は申しわけなさそうにいつて暗がりから進みでた。薄い色の瞳だった。頭の回転が早く、嘘を見抜くのに長たけている。太っているのに身たごなしが繊細で、かなり強い意志のもち主だとわか

つた。安易な接触は避けるべき相手だ。

「お高いのでしょうね」

「はい」

金額は口にせず、男は頷いた。見下しているようには感じさせず、しかし「縁がない」と感じさせる空気を漂わせている。とびこみの客は一切相手にしていない、というわけだ。

「失礼します」

男はひかえめに微笑み、頷いた。

「堂上堂」をでると、陽がまぶしかつた。扉には「営業時間 午前十一時ヨリ午後三時マデ」と書かれた札が下がっている。

私は野暮つたいがそれなりの値のするスーツを着て、髪をひつつめていた。大金持ではなくても、ローンで苦勞している主婦にも見えない扮装をしたつもりだ。バッグと腕時計は中級品を選び、結婚指輪もはめている。

あの男が番頭の石川なら、棚の陰から私を値踏みする時間は充分あつた。何百万以上の品には手がでなくても、何十万くらいの品なら買う客だと見当はつけられたろう。なのに何も勧めなかつたのは、そういう値づけの品はないか、商売をする気がない、ということだ。犯罪にかかわっている匂いはしなかつた。

ホテルオークラに向かう坂を登っていると携帯が振動した。星川だった。

「堂上の自宅がわからない。調べにあがる住所はすべて店だけど、夜はまつ暗だから、住んでないのはまちがいないと思う」

「今、番頭らしい男と会った」

「油断できない感じでしょう。あたしもちらつとのぞいたけど、ヤバいと思つて話さずにでたもの」

「他にわかっている住所は、京都の本籍？」

「そう。あれが本物なら」

やはり浄景尼に会う他ないのか。湯浅がいまましい。見てくれといつておきながら、堂上には容易ではなかった。会えなければどんな人間なのか判断しようがない。

「京都、いくの？」

「しかないみたいね」

「大丈夫？　ひとりで」

「あたしを追っかけ回す余裕はないんじゃない？」

「でもあのとき新山といた中には、しゃばにでてるのもいる」

新山は新宿のホテルで私の口に拳銃をつつこみ、歯を折り、そしてその場で殺す、と吠えた直後、人民解放軍の狙撃手に頭を吹きとばされた。大神は中国側の仲介を一切認めず、その罪を中国マフィアと西に背負わせた。

「新山の縄張りは広島と岡山だった。京都にはいない」

「京都じゃすぐには駆けつけれない」

「自分で何とかする。堂上の自宅を探して」

「なんかさあ、たい働きにしちゃ面倒くさくない？」

「只じゃない。北京ダックを奢ってもらったし、あたしたちがこうして歩き回れているのも、もとをたせば湯浅のおかげよ」